



『看護することの哲学』 『生と死に向き合う看護』

文真 鈴木正子
医学部保健学科教授

少しでも周囲の人たちに「看護」ということを理解していただきたいの思いで書いたのが「看護することの哲学」であり、これより五年先立って書いたのが「生と死に向き合う看護」であります。人間存在にアプローチする、看護の方法論を明らかにしようとした試みの書です。

ケアが求められる時代の

ケアの担い手として

これまで病院の機能は検査、診断、治療、そして延命であると言われ、看護ケアはある意味でその中に埋没される形で行われてきました。高度経済成長から高学歴、女性の社会進出、少産少死、核家族、こうした社会構造の変化と家族構造の変化、あらゆる進歩もたらず競争社会の中で、人々は神経をすり減らして働き続け、進歩に追いついてこようとしてきたといえます。

人々は今、病気になることでしか真に安らぐ時と場はない、と言っても過言ではないでしょう。高齢化社会となった今、病院は疲れた人々、年老いた人々で溢れ返っています。人々はもっと生き生きと生きたい、自分らしく生きたいと願っています。自分の人生はよく頑張ってきたと慰められたいと密かに欲しているでしょう。今や、人々が本当に自分の存在

を受け止められることを願い、真に安心して休みたいと思う場所は、次第に家庭から病院へと移っているように感じます。そうした人々の心を理解し、健康を取り戻し、自己を取り戻し、新たに生き直すことへと共に歩もうとするのが看護です。

高度医療の中での

看護ケア

検査治療を受ける患者の側も、きわめて高度な技術と療養態度を求められる時代になっています。たとえば、糖尿病や人工透析の場合を見れば、患者は自分の健康管理のため、たくさんの知識や技術を習得しなければなりません。一方では遺伝子治療や臓器移植に見られるように、人間の身体を科学する医学のすばらしい進歩があります。その進歩を自分の身体の治療に役立ててもらおうとする患者の側は、誇り高い一方で、自己の存在を脅かされるような不安や恐怖に駆られるということにもなります。

科学は進歩しても、その恩恵に浴しようとする人間の不安や恐怖に耐える側面が、それほど進歩しているとはいえないのです。単に病んだ部分を治すのでなく、一個の人間としてその事態を乗り越えていけるよう見つけ、一緒に越えていきましょうと手伝うのも看護

の役目です。

死ぬときをも含めて 人間の存在

今日、国民の死因の四分の一から三分の一が癌で亡くなる時代になっています。癌と診断された人は、病いの軽重にかかわらず、まるで自分はずいぶん早く死ぬかのようないいと思われ、恐ろしいほどの苦悩にさいなまれます。

一方、苦しみを越えて、淡々と死のその時まで医療の助けを借りながら、自分のやりたいことを最後までできる限りの力でやり遂げる人がいます。今、こうした人々の苦しみをどう理解し、どのような看護ケアをいつたらいのか。医師はもちろん看護婦としても悩み、やはり苦悩しているのが実状です。

しかし、人間は死のその瞬間まで発達するというのは本当です。立派に、自分の家族を思い、自分の人生を思い、人生を完成させて亡くなる多くの人に接しますと、死のその時まで十分に自己發揮して、また周囲の人と十分に関わり合って、満足の中にその人生を終えられるよう、もっともつとよく看護したいとの思いになります。私たちは、患者によつて育てられてもいるのです。

こうした看護ケアを行うには、医学知識はもちろんですが、それ

以上に、人間科学を基礎とする専門知識と態度が求められます。どこまでも関心をそらさずその人を見つめ、一緒にいますよ、ということを伝えていくといったあり方。看護の基本は、専門知識に裏付けられた、人間一人ひとりへの関心と愛から発する独特の働きかけだと思います。

看護することの哲学

―看護臨床の身体関係論

(A5判、一六〇頁、二五七五円)

一九九六年 医学書院

生と死に向き合う看護

―自己理解からの出発

(A5判、二〇〇頁、二〇六〇円)

一九九〇年 医学書院

プロフィール

(すずき・まさこ)

◆一九四〇年大阪生まれ

◆一九六一年京都大学医学部附属看護学校卒業

◆一九九三年(社会学修士)

(東京国際大学大学院社会学研究科)

◆所属 医学部保健学科臨床看護学講座

